

木曽川水系連絡導水路とは

揖斐川源流に造られた徳山ダムに貯められた水を揖斐峡で取水し、濃尾平野北縁を内径約3.5m・延長約43kmのトンネルで貫き岐阜県坂祝町で木曽川に導水するもので、途中一部を岐阜市において長良川に放流して、下流羽島市で木曽川に導水します。「徳山ダム導水路」とも言います。



この徳山ダム導水路事業は二つの目的で実施されます。

①流水の正常な機能の維持(異常渇水時*の緊急水の補給)

木曽川水系の異常渇水時において、徳山ダムに確保された渇水対策容量の内4,000万 m^3 の水を木曽川及び長良川に導水することにより、木曽成戸地点で約40 m^3 /秒の流量が確保できるようにして河川環境の改善を行う。

②新規利水の供給

徳山ダムで開発した愛知県及び名古屋市の都市用水を最大4 m^3 /秒*導水することにより、木曽川で取水できるようにする。

* 愛知県上水2.3 m^3 /秒、名古屋市上水1.0 m^3 /秒、工水0.7 m^3 /秒

導水路事業の「継続」が決定

昨年(2024年)8月、国は徳山ダム導水路事業の「継続」を発表しました。この事業は「検証中」という名のもと15年間凍結されてきており、現場では1mの工事もされていません。誰も必要としない事業で市民からも忘れ去られていました。ところが、「事業撤退」を掲げていた河村名古屋市長(当時)が一昨年(2023年)突然導水路を容認する方針転換を表明したのを機に「凍結」が解除され、事業が動こうとしています。

暴走する名古屋市水道

河村氏は、名古屋市の水資源確保は、過大で誤りであったことを認めながら、導水路を容認する方便として「新用途」を提案して市民を驚かせました。現在、広沢新市長のもとで名古屋市は新用途案に基づく市独自の「直接取水」工事のために、さらに事業費50億円追加を議会に提案し、暴走し始めました。

地下水や長良川環境は大丈夫？

岐阜市をはじめ、導水路ルート沿線自治体・事業所の水道水源は全て地下水ですが、リニアトンネル工事で地下水位低下と地盤地下の甚大な被害を受けている岐阜県民にとって導水路工事にも同様の心配があるにもかかわらず、事業者から地下水対策の説明は何もありません。

長良川への放水地点は長良古津または志段見とされていますが、この地点は長良川鶴飼の直上流、「御料場」「献上鮎漁場」と呼ばれる聖域です。ここに、徳山ダムの冷たい水を放流？

何という世界農業遺産「清流長良川の鮎」への冒涇でしょう。

長良川鶴飼



市民にまともな説明もなしに
890億円→2,270億円

事業費**2.5**倍に増額して

動き出した木曽川水系連絡導水路事業
(徳山ダム導水路事業)

STOP!

延長43kmの地下トンネル工事

徳山ダム導水路

導水路はいらない！愛知の会

(連絡先) 090-3445-5913 加藤

よみがえれ長良川実行委員会

(連絡先) 090-1284-1298 武藤



2025/5/10

徳山ダム導水路計画には そもそも無理がある

なに？この目的

流水の正常な機能の維持 (異常渇水時の緊急水の補給)

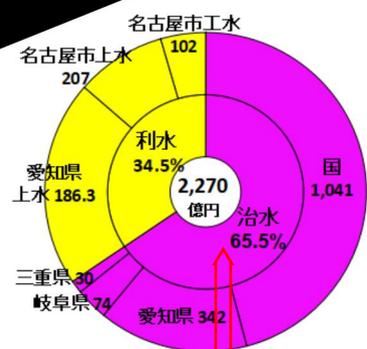
導水路事業の第一の目的とされ、建設費の65.5%を「治水」で占めますが、洪水対策ではありません。1994年(平成6年)に起こったような大渇水の際にも、河川環境が守られる水量を流すというものです。具体的には、木曾川でヤマトシジミが、長良川ではアユが生存できる水量を確保するものとしていますが、流量の根拠は「歴史的経緯で決まっている」と繰り返すだけで科学的根拠を示しません。

あの渇水の時長良川の鮎の姿が消えましたか？そうでないことは、地元住民や釣り人が一番よく知っています。

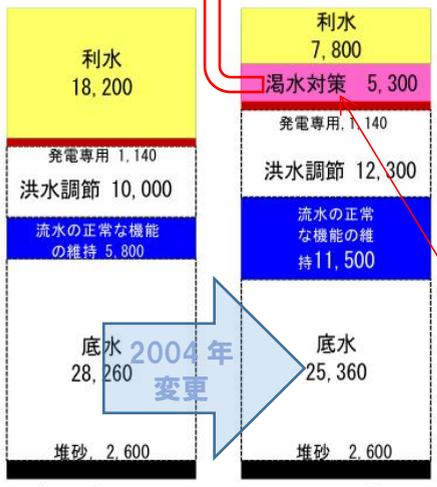
国は木曾川のヤマトシジミの生息のためと言いますが、河口堰を建設して長良川の流れを止め、ヤマトシジミを絶滅に近い状態にしてしまったのは、いったい誰？

おかしい目的はなぜできた？

このおかしい目的は、都市用水の需要が減少する中で2004年の国の水資源開発計画変更で誕生しました。徳山ダム建設の完成を目の前に、**利水者が撤退**した穴埋めとして**つくられた**(5,300万 m^3)のです。導水路はその内4,000万 m^3 を流すもので、もともと道理のないものです。



徳山ダム導水路建設費の負担割合



2004年変更
徳山ダム容量 (6.6億 m^3) 配分

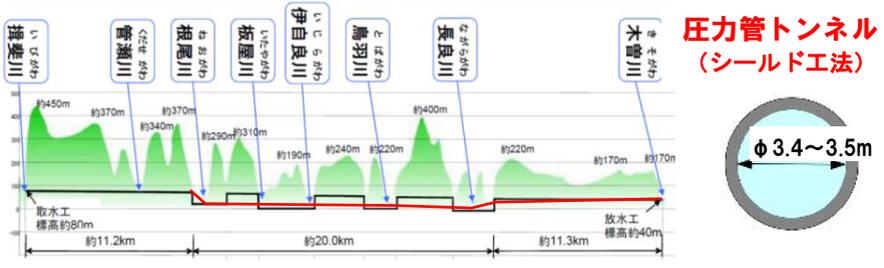
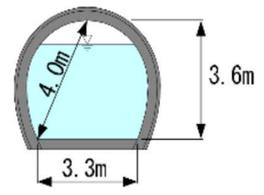
トンネル構造も工法も変わったのに、説明がありません

昨年(2024年)国・水資源機構は事業費約2.5倍の増額を発表した際、下の縦断面図の黒線から赤線に変えるものを突然提示しました。根尾川から木曾川まで全て圧力管にするというのです。

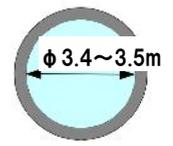
当初計画の開水路トンネルを主体とする山岳工法(ナトム工法)では、周辺の地下水位を約10m(工事中は約30m)低下させることが推定されるので、地下水影響が限定的かつ一時的なシールド型TBM工法で施工し根尾川から木曾川までの区間、高水圧のパイプに変えるいうものです。

しかし、**地中深く建設した長大な高圧水管**をいったい将来どうやって管理していくのでしょうか。最近の埼玉県の下水陥没事故、あちこちの都市で発生している水道管破裂事故のニュースを目の当たりにし不安が募りますが、どこでどのような工事をし、完成した導水路をどのように運用・維持管理するのか、地元自治体にも住民にも全く説明がありません。

開水路トンネル (ナトム工法)



圧力管トンネル (シールド工法)



なんで徳山ダムの水が必要なの



高度経済成長期、水洗トイレや電気洗濯機の普及で水需要は伸び続け、名古屋市は様々なダム建設計画に参加しました。しかし、1975年をピークに給水量は減り続けています。節水志向と水回り器具の節水技術開発でさらに水需要は減るでしょう。

現在、木曾川の水利権も持て余しているのが現実で、長良川河口堰や徳山ダムの水を取水する必要は全くありません。

